

憲法を起草する会《大阪》【第四回】令和3年7月24日



●おやじ

前回までは、自分達が日本の国のルールを定めるとしたら、どういう内容を盛り込めば良いかということ、皆様の意見を聴きながら議論を進めてきた。

本日は、歴史的にそのようなものが記載されている文章で、優れていると思うものをそれぞれ1点探して来て下さいという事をお願いしているので、それをベースに具体的な話し合いを進めていきたい。

■死生観

●参画者

本日が初参画。少しずれているかもしれないが、何か持って来て下さいということだったので、特攻隊の本を持って来た。

自分自身、日本のことや、歴史などについてあまり興味を持てていなかったが、ある勉強会で、鹿児島県の知覧の記念館に行った際に「日本を想った先人達が居て、自分達が自分が居るんだ」という事を実感した。

「大切なものを大切にしたい」という「愛」を大事に生きて来られた、特攻隊の方々の生き方が美しいと思った。そこに感動し、「日本をもっと大切にしたい」と感じた。

死生観など、そういった事について、自ら考えることができるような憲法ができれば良いと思います、今回参画させていただいた。

本に関しては、中身がどうかというよりは、大切にしたい想いのイメージとして、特攻隊の本を持参した。

【十七条憲法】

●参画者

資料配布：「訓読みで読む 職場の人間学としての十七条憲法」・「十七条憲法について（憲法を起草する会 参考資料）」

聖徳太子の作った十七条憲法の資料を制作して来た。今回は、「十七条憲法について（憲法を起草する会 参考資料）」の説明をさせていただきたい。

本日の講義の中で、十七条憲法が、国体法の中の大事な一つとして出てきた。知らない人はほぼ居ないと思うが、十七条憲法を読んだことがないという人は居るのではないかと思う。

（手を上げてもらって）会場でも半数以上が読んだことがない人。中には知っている人も居るかと思うが、知らない前提で説明をしていきたい。

十七条憲法とは何か？「日本最古の成文憲法」と言われている。日本で一番古い、文章になった形の憲法であるということ。

ここで読み方を考えていきたい。本当は訓読みで読むのが正しい。

「いつくしきのりとをあまりなをち」

というのが本当の読み方と言われている。

いつ作られたかと言うと、今から1400年前の、推古天皇12年（西暦604年4月）に聖徳太子が作ったとされている。日本書紀に全文が掲載されていることが、作った証拠となっている。日本書紀というのは、日本で作られた最古の（と言われている）正史。

▼時代背景

十七上憲法が出来た時代の背景を考えていきたい。

1. 蘇我氏が物部氏を滅ぼし、崇仏派の蘇我氏が力をふるい、崇峻天皇を暗殺するなどの政変・争乱が生じており、国内の分裂・対立を収め、心を一つにする必要があった
2. 印度（インド）の文京思想の伝来、随の興隆による儒教思想の伝来など、最先端の海外の文物・制度を採り入れ、国内をまとめる必要があった
1. 前年12月には冠位十二階を定め、従来に身分にとらわれず、能力ある人を朝廷に登用しようとした。そのため職場をうまくまとめる必要があった

天皇と惟神（かんながら）の道に基づきつつも、仏教と儒教の海外思想を採り入れ、人心を統一し、政府をまとめるための規範とした。

と言われている。大事なところは、国内をまとめる必要があり、仏教や儒教という、海外の最先端のものも採り入れていったという事。

そこから飛ばし、聖徳太子がどんな偉い人だったのかということが資料には書いてある。素晴らしい人であったが、しかし、最近では「聖徳太子は居なかったのではないか？」という話もあり、話が徐々にそれてしまう仕様に。

▼聖徳太子の偉業

聖徳太子の偉業は資料の10ページの上に記載。聖徳太子は偉い人だったので、素晴らしい偉業を残している。

- 三宝興隆の詔
- 冠位十二階の制定
- 憲法十七条の作成
- 仏像建立
- 随への使者派遣・対等外交
- 三経義疏の作製
- 天皇記・国記の編纂
- 歴の制定？（どういう暦かわからないがそういう記載もある）
- 天皇号の考案？（推古天皇の辺りから天皇という号が使われていると言われている）

▼憲法十七条は「憲法」か

資料の13ページ『憲法十七条は「憲法」か』という欄を説明していきたい。近代法としての「憲法」に当てはまるか否かということ。

そういう視点で見ると憲法ではないとする説もある。単に官位に対する訓戒ではないか？とか、道德規定が多いので法律ではないとされるような説もある。

ただ、国の根本原理が書かれているし政府の基本方針が明確に打ち出されているので、憲法ではないかと言われてもいる。

また、当時憲法が作られていなかったのではないかとする「十七条憲法偽策説」や、十七条×五憲法を作ったとされる「五憲法存在説」等、様々な説が存在する。

▼十七条憲法の与えた影響

次に、15 ページの「十七条憲法の与えた影響」について。十七という数字が後にも踏襲されている。

「維摩経」仏国品に仏国建立の菩薩の心性として、直心以下の十七事が挙げられており、聖徳太子も「三経義疏」で「万善は是浄土の因なりと明かす中について凡て時十七時あり」と記している。

- 鎌倉時代「貞永式目」51 条（17×3）
- 足利尊氏「建武式目」17 条
- 徳川家康「公家諸法度」17 条

と、17 という数字が後世の法典にも使われるように。

また、十七条憲法が世界最古の成文憲法という説もある。国体の在り方を表した憲法としては、マグナカルタより古い。

ハンムラビ法典やローマ法等あるが、国体の在り方を明確に成文で打ち出していないというところからすると、聖徳太子の十七条憲法が最も古い国体の在り方を表した憲法ではないか、という説もある。

▼十七条憲法は今も有効か？

また、19 ページの十七条憲法は今も有効か？という問題もある。十七条憲法はその後、改正されたり、廃止されていない。誰かが廃止したり、「十七条憲法改正！！」と言った人は居ない。

昭和二十二年法律第七十二号は、「日本国憲法施行の際現に効力を有する命令の規定の効力等に関する法律」であり、「日本国憲法施行の際現に有する命令の規定で、法律を以て規定するものは、昭和二十二年十二月三十一日まで、法律と同一の効力を有するものとする。」というところに、十七条憲法が当たるかどうかと言われれば、どうかわからない。

私は当たらないとも思っているので、未だ有効ではないかと思っている。

▼十七条憲法の訓読

21 ページの十七条憲法の訓読というところで、大和言葉で読むことが正しい。十七条憲法は、原文は漢文で書かれている。23 ページには、写真を掲載しているが、これは国宝の岩崎本という日本書紀の写本。

平安時代に写された、日本で最古の写本。三菱家に伝来している。そこにはよみがなが記載されており、「いつくしきのりとをあまりななをち」となっている。

また、「和を以て」というところも「わ」と読んでいない「やはらかなる」とか「やはらぎ」とか「あまなひ」と、訓読みされている。

そのように、平安時代の古写本には訓読みで読んでいるところがあるので、訓読みで読んでいくのが正しいということになる。

▼第一条やわらぎ

今日は、時間も無いので、一行だけ紹介させてもらいたい。30 ページの十七条憲法の内容の「第一条やわらぎ」というところだけ最後に紹介し、発表を終わりたい。

十七条憲法 第一条

一に曰く、和（やわらぎ）を以て貴しと為し、忤（さか）ふること無きを宗とせよ。人皆党（たむら）有り、また達（さと）れる者は少なし。或いは君父（くんぷ）に順（したが）わず、乍（また）隣里（りんり）に違ふ。然れども、上（かみ）和（やわら）ぎ下（しも）睦（むつ）びて、事を論（あげつら）うに諧（かな）うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事成らざらん。

意味は、31 ページに記載。「わ」というものの良いのだが、「やはらぎ」と読むことによって意味が変わって来る。

職場では、なごやかな雰囲気、やわらいだ空気が最も大切です。ぎすぎすしたり角が立つような状態が決してないようにしまよう。人間は皆自分の利害や考えにとらわれがちであり、ものすごく聡明な者は少ないのですから、上司や親の言うことを聞かず、また家や村ごとに考えも違います。しかしながら、上司やなごやかな空気を作り出すことで、部下もなかむつまじくなり、議論をするときもなごやかな雰囲気があれば、お互いの考え方が自然と通じ合いどんな事業でも実現することができるようになります。

という意味がある。

最後に、「和（やはす）」ことの重要。和というのは、和風とか、和食とか、和室、和服等、「和」ということ自体が日本を表す。「やはらぎ」とも読むが、「やはす」とも読む。

「やはす」と読むのは、実はなかなか深い意味があり、「やはす」というのは、部下たちを「やはらがす」ことを「やはす」と言う。「やはす」ということが何なのかということが、なかなか従来わかっていなかった。

「ホツマツタエ」という昔の文献があるが、ここに天照大神の歌がある。

「あめがした やわしてめぐる ひつきこそ はれてあかるき たみのたらちね」

つまり、天の下を和（やわ）して巡る、太陽と月は、晴れて明るい、民の親である。このように天下を和すことがアマキミ（天皇）となるものの役割であるということを言われている。

何故天照大神がこのような歌を詠んだかということ、須佐之男命に、国を治める者の役割としては、太陽と月のような存在でなければならないという事を諭した為。

聖徳太子は太陽と月のように万物を和すということが最も大切だという、天照大神の歌を知っていた可能性がある。

というものの、「伊予国風土記」に、聖徳太子の師 慧慈が書いた道後温泉の碑文に、

「惟ふにそれ、月日は上に照らして私せず。神井は下に出て給（た）らざるなし。万機はゆえに妙応し、百姓はゆえに潜扇す。すなは照らし給りて偏私なきは、何ぞ千寿国に異ならん。」

とある。

道後温泉の素晴らしさを讃えた時に、聖徳太子の思いとしては、お日様と月は、全てのものを照らし、自分のものだということとはできない。全てのものを遍く照らしていく。温泉も下から出ていってみんなを遍く浮き渡らせる。このような在り方は正に政治の在り方と同じであり、そのような姿勢が政治家としての在り方ではないのか。

聖徳太子はそういう思想のもとにこの和（やはらぎ）ということを理解していた可能性がある。

お日様のやわすという働きが最も姿勢として大切で、天皇としてのやわすという働き、また、職場では上司がやわすということが大切ではないのか、という事をまで言っていたのではと思う。

●おやじ

十七条憲法についての質問はないだろうか？

もしくは、十七条憲法に対しての異なった理解などがあれば紹介して下さい。

●参画者

十七条憲法は、皇朝学では、「やはらぐ」というよりは、「なごむ」、「あまなふ」、「ながらふ」と読む。

「一に曰く、和（やわらぎ）を以て貴しと為し、忤（さか）ふること無きを宗とせよ。」

我々（皇朝学）は十七条憲法を服務規程として読んでおり、（誤解を恐れずに言うと）民衆が天皇に対して逆らうことなきを宗とせよということ。

「ながらふ」というのは調整する、あるいは釣り合うという意味がある。民衆と天皇の間をうまく調整し、民衆の不満が出てくるのを調整せよということではなかろうか。

●参画者

質問なのですが、十七条憲法は、法律という分類となるのだろうか。

私の法律のイメージとしては、「～をしたら罰則がある」というイメージだが、法律ということの良いのだろうか。

●参画者

十七条憲法は法律であり、憲法、国体法、つまり国の在り方を決めている。

「国民道徳・生活規範等」の「天皇法」という分類に十七条憲法があったと思うが、確かにそういう側面はあるが、私の意見として国柄を示す法律ではないかと思う。

資料の28ページのところに、「国家の基本的秩序や考え方を定めたもの」というのがあり、第三条は国体法的だと言われることが多く、君臣の別を記している。

天皇を天に例え、臣下を地と示している。その在り方を壊さないようにするのが国としての在り方だということを示している。

微妙なところもあるが、「うやまいを国民全員に求める」という第四条の規定のように、十二条の「国に二君なし」という文言であったり、「公に向かうが臣の道」という十五条の規定であったり、国体法的な規定が含まれているのではないかと思う。なので、十七条憲法は、憲法にあたると思っている。

●参画者

僕のイメージとしては、十七条憲法は国を表すというよりは、役人や政治家を規定するようなものだったのではないかと感じる。そういうイメージとは異なるのだろうか？

●参画者

そういう規定として作られた節もあると思うが、第三条を見てもらおうと、小森義峯先生という憲法学者の方が、第三条の規定は国体法として定められたのではないかとおっしゃっている。

十七条憲法 第三条

三に曰く、詔を承りては必ず謹（つつし）め、君をば天（あめ）とす、臣をば地（つち）とす。天覆い、地載せて、四の時順り行き、万氣通ずるを得るなり。地天を覆わんと欲せば、則ち壊るることを致さんのみ。ここをもって君言えば臣承（うけたま）わり、上行けば下靡（なび）く。故に詔を承りては必ず慎め。謹まずんばおのずから敗れん。

天皇のお言葉に対しては必ず謹しみなさいということ。

服務規程とも言えるが、天皇と臣の関係をはっきり記載してある。そういう意味では国体法的規定が見受けられるのではないか。

十七条憲法 第四条

四に曰く、群臣百寮（まえつきみたちつかさつかさ）、礼を以て本とせよ。其れ民を治むるが本、必ず礼にあり。上礼なきときは、下齊（ととの）はず。下礼無きときは、必ず罪有り。ここをもって群臣礼あれば位次乱れず、百姓礼あれば、国家自（おのず）から治まる。

第四条に関しては、役人宛ではなく、民に対しての規範も記載されているよう、見受けられる。なので、必ずしも服務規程のみではないと感じる。

●参画者

今の我々から見たら服務規程のように解釈できるが、当時は国体法としての要素も含まれており、文章化されていた可能性はあるかもしれない。

●参画者

要するに、十七条憲法は、素晴らしい規定で、小学生にもちゃんと読ませないといけないと思っている。

●おやじ

強制法は性質自体が歴史的に日本にはない。なので日本という国を定める上で、強制法は合わないのではないかと思う。条文に逆ったら駄目だというようなものが憲法ではないような気はする。

近代西洋や中国での法というのは、警察力、実行強制力というものが伴って初めて法と呼ばれる。

日本人の場合、それがほとんど見当たらない。近代以降、西洋の影響を受けて、そう思い込んでいるだけではないかと思う。

日本人の場合、強制力がなくても実行する。また、司法権というものも、民衆が持っていれば良く、公が持つておく必要はない。

江戸時代まで、警察機能も司法機能も村が持っていた。中央に主権を持たせたのは近代以降でしかない。

自分たちで、自分たちのルールを乱すものに対して、司法的判決を下して、罰則を与えた。日本的な慣習からすればそういうものではないかと思う。

▼十七条憲法ができる前史

十七条憲法ができる前史をよく理解していた方が良い。聖徳太子というのは、蘇我氏と物部氏の対立時代に生まれた。王子のときに蘇我氏側に囚われ、自分の意思とは関係なく、物部氏と対立関係になる。

物部氏が中央政界から排除され、蘇我氏の全盛になったとき、推古天皇は蘇我馬子、入鹿の言いなりの状態。そのときに政治に関わっていたのが、聖徳太子。

第四回 議事録

真っ向正面からやると対立し、暗殺されてしまうので、惟神の道を憲法として定めた。

天皇さえも殺すような、詔に従わないような輩が政体の長に居座る為、「詔には従えよ」という事を入れたのではないかと思う。

そういうバックグラウンドも含めて、聖徳太子というのは、本当によく日本の国柄をまとめていただいたと感心する。

●参画者

皆さんみたいに詳しく吟味してないし、知らない事も多いが、「憲法」という字を言霊的に観ると、「憲」というのは規制、固定する事。

また、「法」というのも、水を取り、そこに縛りつけるようなもの。

「憲法」というのは、両方とも「監視する」、「縛りつける」というような字。

本当は国体法という解釈をしたいし、そのようなものであって欲しいと思うが、日本書紀の原文を見ても、「憲法」と記載されているので、頭から規制するものなのだと、自分なりに解釈をした。

●参画者

自分自身もよくわからないが、当時、聖徳太子がどう役人に伝えたかという事。

音読みしていたのか、訓読みしていたのかもわからない。漢字で書いて渡したのか、言葉で言ったのかもよくわからない。

役人が当時、みんな漢文を読めたのか？中国語の発音で、「ケンポウ」と言ったのか？どちらもないのではないかと思う。やはり大和言葉で口伝で伝えたのではないかと思う。

そうすると、漢字とはそこまで意味があったのだろうかと思う。例えば、社長が会社の決まりを作ったとき、「紙に書いたから読んどけ」とはならないのではと思う（中にはそういう会社もあったのではと思うが）。

普通は口伝するのではと思う。その時に、「憲法」と言ったのではなく、「いつくしきのり」と言ったのではと思うので、漢字とか音読みにとられる必要はないと思う。もし詳しい人が居たら教えて欲しい。

●参画者

果たして、中国人が読めるのだろうか？

●参画者

わからない。そこも議論があって、倭習という事もあるのではと思う。純粋な漢文ではなく、和風にアレンジされているということもあるのではないかと。

●おやじ

もし、中国語で読めないのであれば、古事記と一緒に、漢字に意味が無いということになる。レ点を打って中国語読みができるのであれば漢字にも意味があるのだが、読めないのであれば当て字だと思う。

ぱっと見た感じ、当て漢字になっている気がする。憲法自体は「のり」なので、「のり」という意味は間違いなくあったらと思うし、「いつくしき」という言葉を乗せている理解としては間違えていないのではと思う。

内容的には、今の人が読んでも、内容がおかしいとは思わない。今の公務員の倫理規定よりは、十七条憲法の方がよっぽど良いと感じるのではないか。

日本人であれば、時代を超えてこのまま使える文章の内容になっていると思う。

教育勅語・武士道

●参画者

資料配布：「教育ニ關スル勅語」

幕末から明治のご維新の原動力になった思想で、「水戸学」というのがある。その後期水戸学の中で、会沢正志斎の「新論」という書が、教育勅語の半分の基になっている。

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及

ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ
明治二十三年十月三十日
御名御璽

「朕」というのは天皇陛下の事で、「皇祖」は神武天皇。「皇宗」は歴代の天皇陛下の事。

水戸学というのは、儒教系の国学なので、歴史は語らない。人からしか語らない。なので神武天皇から語っている。

「億超心を一（イツ）にして」という、一つになる原理は「忠孝」だということが記載されている。

神武天皇の御代に返る、という明治政府の大方針であり、「報本反始で、神武建国に復古する」という建前でそういうことになっている。

その時の原理というのは、「臣民克ク忠ニ克ク孝ニ」という事で、「忠孝」であると言われている。

儒教では、「忠」と「孝」は一致せず、時に対立する概念である。例えば、戦場で戦っていて、お母さんが病気だと、最前線から離脱して家に帰っても良いとされる。「孝」が最優先されるので「忠孝」が一致しない。

しかし、日本人の場合は、「忠孝」は一致する。その忠孝一致が我々の歴史の成果であると。そして、教育の淵源もまたここにあるということが書かれている。

近代前は道を修行する。しかし、近代以後は教育するということになっている。

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

ここに関しては日本が近代国家として、コミットメントの仕方を表現している。何故かと言うと、ここまでは外国語に翻訳することができる為。我々の国はこうだということを外国に向けて言えるような事。

是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所

上記に関して、共同体としての民族なので、ここで少し神話が入って来る。例えば、天照大神が岩屋戸に隠れた時、祭祀が出てくる。そして場面は代わり天照大神の孫、皇孫が天孫降臨し、その時にいろんな氏族の元になる神様が伴って高天原から降りて来る。これが天皇の周りに居る氏族の先祖になる。

そういう役目がそれぞれにあって、中臣だったら祝詞を奏上する等、各氏族に役目があった。役目通り先祖がやったことを我々もやるのだということが記載されている。

明治になった時に即位の礼をする際、物部氏は遠く昔に滅ぼされているので、帝国陸軍が物部氏の代わりをする。我々が伊邪那岐、伊邪那美の神業として繋がって来ているので、先祖がやって来たことをやる。

天皇も一緒に、歴代の皇祖皇宗がやって来たことをやるという事。

儒教系国学ということで気に入らないところもあるが、今までの我が民族の神話からの考えと、それまでの共同体としての慣習的なものを近代国家として、我々の民族のそれを文章化したらこういう形で、教育勅語は良い文章だなと感じる。

●参画者

5つの資料を持って来た。ここで考える憲法というものは、人の言動を縛る規則ではなくて、一人ひとりが自発的自律的に思考、行動できるような脈々と続く規範。

日本人という宇宙という大きなものの見方を伝えるものは何かなという理解で探して来た。

▼古事記

古事記はとても長いし、読むのも骨が折れるし、解釈も様々だと思うので、そのまま用いると本質がずれてしまう懸念がある。

その中で、西洋ということを考えたとき、全知全能の唯一神が非常に多い。古事記の登場する神様というのは、働くし、恋とか恋愛もするし醜くもなるし、困難から逃げたり、我儘になったり、非常に人間らしい存在だなと解釈している。

明治天皇がおっしゃった「ちはやふる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり」という歌にもあるように、人間というのは、古事記で言われているような神様を自分自身に投影しながら、人生や使命に立ち向って、人々、民を救い、国を豊かにし、滅私の心で平和を想うというのは、日本における神であり、それは自分自身なんだということを伝える事のできるツールなのかなと思った。

▼建国の勅

日本の国をどのような国にしようと思いついたのかという原点に立ち戻るには一番適していると思っている。

▼武士道

武士道的な思想が一ついいのかなと思う。「武士道とは死ぬことと見つけたり」と過激な思想と捉えられがちなので、丁寧に扱っていかなければならないと思うが、「義」、「勇」、「仁」、「礼」、「誠」、「名誉」、「忠義」という7つの思想で新渡戸稲造はまとめている、自律的な人間を養う為に非常に重要な観点だと思っている。

それが、武士階級だけではなく、民衆にまで伝わっていたとこの時代に彼は書いている。

「日本には宗教教育が無い。あなた方はどのように道德教育を授けるのですか？」という外国人からの質問に対して、「日本には武士道というもので民衆に道德が伝わっている」とう答えがまとめられている本。

民衆にまで伝わっていたということで参考になるかと思い、持ってきた。

▼ティール組織

私は職業柄組織論というものを勉強しているが、「ティール型組織」という最も先進的である組織論がある。そこで言われているのが、組織には五段階ほどのステージがあって、その最も進歩的なものがティール組織という理論。

進歩的と言われている組織になったら、そのステージに到達した個人や組織は、物質主義から開放されて慎ましい生活を送るということや、人生に於いて富を求めるのではなく使命を遂行すると欧米の方が書いている。

もともとの日本的な考え方と似通っていて、もしこれが欧米に於いて最も先進的な組織と言われているのであれば、日本人は遠の昔にこの段階に達していたのかなと、武士道の本を読んでも思った。

▼五箇条の御誓文・教育勅語

明治神宮で頂いて、ちょこちょこ読んでいます。

歴史的な様々な教訓を踏まえた上で、日本文化も尊重しながら外国というものも視野に入れて発せられたもの。

初めて強大な外的にさらされた時に、新生日本として天皇陛下が大切にしていこうというものを書いたものなので、グローバルというものを視野に入れられないといけない現代において参考になるかなと思った。

●参画者

「忠孝」についてもう一度お聴きしたい。

●参画者

「忠」と「孝」は儒教の概念。先程の言ったように、儒教は、「孝」を最優先する。「忠」と「孝」が両立することはない。「孝」を優先しても良いということ。

我々日本人は、「億兆心を一にして」というのが忠孝であるという事。現代で言えば、「億兆心を一にして」というのは民主主義だと思う。

何故「忠孝」が一致するのかと言うと、武士の時代が長く続いた為、「忠孝」と「武」というのが全て一致している。

例えば戦場に出て死んでしまっても、その家が存続する限り続いていく。

関ヶ原の合戦の時に、鳥居元忠という人物が、伏見城に籠もって玉砕する。それでも家が総和としてあるので、自分が死んでも、家さえ残っていれば全然 OK ということになる。

武士の時間が長かったので、武士の概念として「忠孝」が一致していった。

●おやじ

「正調黒田節」というものがある。「酒は飲め飲め、飲むならば……」という黒田節の正調がある。

大切にすることは何なのか？という歌詞。それは自分の持っている真心を「忠」と「孝」に尽くすべしというのが正調黒田節の歌詞。自分の「誠」を、「忠」と「孝」に捧げる事を武士の道とするとっている。

武士の棟梁というのは源氏。清和源氏と村上源氏と言うが、いずれにしても親をたどると天皇に繋がっていく。更にもっといくと、天之御中主に繋がっていく。

報本反始という、元を考えるとみんな一緒なんだよというアイデアがある。我々は個別バラバラではなく、親をたどっていくと祖先は一致する。

神々の御代まで遡っていくと、最終的には天之御中主で一つにまとまる。そこを頼りにしていくというのが「忠孝」の考え。自分たちのオリジナルをちゃんと考えていきましょうという事。

教育勅語をもし読まれていない方が居たら読んで欲しい。「億超心を一にして」という同じ心の拠り所を示す、というのが教育勅語の一つの狙いでもある。

明治になって西洋化が急速に進んだ。東京大学を作ったとき、明治天皇が視察されて、英語ばかり使う教えに驚かれた。

洋学しかしない。儒学もしないし国学もしないということがあり、非常に危機感を持たれたというお話がある。近代以降の日本というのは一旦モラル・ハザードを起こす。武士をつぶす事により、そうってしまった。

庶民の間でも、慣習的な倫理観はあるのだけれども、倫理道德を明確に打ち出していたのは、武士だった。

武士という階級は、国の諸々の権限に関わり、国（藩）の運営に責任を持つ立場だったので、政治行政司法を武士が全て持っていた。その為、強烈に自己規定するモラル規定があった。それを一色単に「武士道」と呼ぶ。

庶民には、後世に文章として残っているような倫理規定はない。

武士を全て撤廃したとき、「武士道」も含む、武士の全てを一旦批判してしまった。そしてモラル・ハザードが社会的に起きる。

教育現場でのモラル・ハザードを感じ取った明治天皇が非常に危機感を持って、教育に関するいくつかの詔勅をいくつもいくつも出した。そして最終的に出したのが教育勅語。

その間、やった結果どうなった、やった結果どうなったと、確認されながら実施されてきた。

西洋に関しての道德倫理というのは、宗教が全て担っている。西洋では世俗にそういうものはない。無宗教＝無倫理・無道德となってしまう。

日本は、神道という惟神の道を宗教とは認識していない。実際に経典も無いので、神道は宗教でも無い。

日本の宗教者達が、「日本の道德観は武士道という形で如実に表れている」と言った。それが新渡戸稲造。「武士道」は、基本的に外国人用に書いた書物であり、元は英語版。

では、今回起草する憲法に「武士道」を採用したらどうか？となる。

ところが、武士道に、全日本武士道というものはない。基本的に武士道というのは個人の倫理観を自律的に管理する為のもの。道徳的に、倫理的に自己を管理していく主体的なもの。

宮本武蔵の武士道は「独行道」というものがあるが、これも自分で認めるもの。「我、神仏を尊びて、神仏を頼らず」など、自分で認めていくもの。

幕末の山岡鉄舟にしても、「二十一脚」というものを15歳で元服した歳に、自分で自分の武士道を書いた。楠木正成も壁書して、「自分は愚かなるゆえ、壁書して謹むのみ」と言っ
て、自分の武士道を書いた。

武士道というのはそういう性質のものなので、「じゃあこれを採用しましょう」というものは残念ながらない。せいぜい鍋島藩の「葉隠」。

葉隠も鍋島藩の山本常朝が服務の参考書として作ったようなもの。

武士道というのは、一つ一つが非常に良い倫理規定が書いてあるが、個人以外には使えるものではない。そんなもの。

100年企業

●参画者

100年企業など、老舗の家訓を参考したものを資料として持参。

日本は世界で一番断トツに老舗が多い。100年企業は3万社。200年企業は1300~1400社。その中に日本の文化があり、日本らしい経営の中でそれが成り立っていった。

老舗が大事にして来たこと。

「勤勉」・「正直」・「感謝」・「辛抱」・「儉約」。そして、「知足」。

他の教育勅語などに無いところで、人々が大切にしていきたい生き方で、戦後、いつの間にか忘れていた「儉約」や「知足」というのがとても大切だと思った。

なんでもかんでも欲望に駆り立てる社会はいかがなものかと疑問を感じる。

儉約や知足というものが憲法に入るかわからないが、日本人が大切にしてきた規範として護りたいと感じた。

当時、寺子屋で、軸として教えていたのが「仁」・「義」・「礼」・「智」・「信」。

- 仁…人を思いやる、儒学ではこれを最高の道德とした
- 義…利にとらわれず為すべき事を行う、義を貫くことを正義という
- 礼…仁の具体的行動、敬意を表す心、生活規範、礼儀作法を学ぶこと
- 智…学問に励み正しい知識・経験を身に着け洞察力を高めること
- 信…友情に厚く誠実であり約束を守ること

これらを大事にして来たベースがあって、日本人が日本人たる文化を形成してきたのではないかと思う。

日本全国で道德心が高かったのは、こういう事をベースに全国的に子供の時から教育していたから。また、商売をする中でも社会の一部としての規範意識を持っていたからではないかと思う。

こういうものを規範として持っていきたいと思う。

●おやじ

近現代以降、成功した方の書物は出ている。少し前までは出光佐三さんのように非常に日本的な経営の本が沢山あったと思うが、最近は銭儲けした人が偉そうに本を書いて、そのうちいなくなってしまうという傾向が非常に多いと思う。

商人としての立場、商人の役というのは、今はメインどころになってしまっているが、世の中に貢献する為の補完的な仕事として生まれてきた。

それまでは自立社会なので、ビジネスに依存するところはほとんどなかった。だんだんと商業化が進んで来ると、ビジネスで補完していかないといけないところがあった。ただし、あくまで世のため人のために社会に貢献するという趣旨でやっていたはず。

それが極端に変わったのは近年。冷戦が終わり、新世界秩序に変わって以降、極端に経営のコンセプトが変わった。

ビジネスをしていない人も、そのルールの中でしか生きれない状態になってしまっている。ビジネスの現代的な理解の対極にあった商人の考え方とはどういうものがあったのかを見ると、道筋がわかりやすいかもしれない。

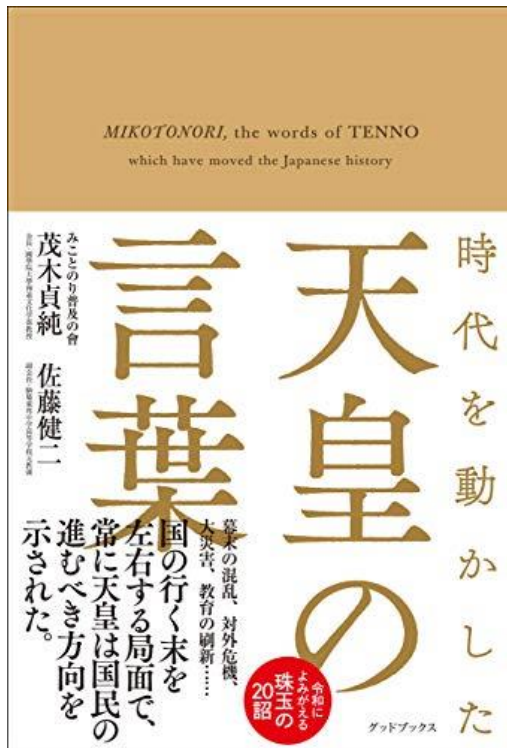
谷町筋にある、金剛組が世界最古の会社。金剛組の歴史を調べてみると本当に勉強になる。

聖徳太子が作った会社で、四天王寺や法隆寺に関わる会社さん。日本の文化をそのまま会社として引き継いでいる。非常に立派な会社。

■ 詔・天皇の言葉

● 参画者

「時代を動かした天皇の言葉」 茂木貞純・佐藤健二



近代の上皇陛下から後桜町天皇、桃園天皇までの詔がコンパクトにまとまっていて 1,800 円。この会に来るまではこういう勉強をしたことがなかったので、とても勉強になった。

大東亜戦争、終戦の詔や、対アメリカに対して戦争を始める時の詔など、時代背景が書かれている。明治天皇の詔が一番多く書かれているが、とても勉強になる。

憲法を起草する上で、全国民がこれを読むと、今の憲法を廃止し、正しい憲法を作らないといけないと思うのではないかと思った。

● 参画者

同じ「時代を動かした天皇の言葉」を持って来た。
上皇陛下のお言葉を見て、ビンと来た。

新しい憲法を作るにあたって天皇陛下の想いについてちゃんと触れたかった。

「国民統合の象徴」の証であり、またわが国の古来一貫する国柄の表明にほかならないのです。

という言葉を見て、「正にそうだ」と思って持って来た。

今日の講義の中の図を言葉として解説にしているのではないかと思う。

●おやじ

詔勅という言葉を使わせないようになっているので、天皇陛下のお言葉となっているが、事実上詔。現行憲法により詔を禁止されており、現憲法を規定する時の詔が最後の詔。

現憲法の第十章にあるように、天皇陛下の詔と言えども、現憲法の思想に反するものは認めないとうたっているので、非常に詔を警戒している。

歴代の天皇陛下の詔も、上皇陛下のお言葉も、今上天皇のお言葉も、言っていることは一緒。ちゃんとご歴代天皇の言葉をちゃんとご理解されて、今の言葉で言っているということがわかる。

「憲法を尊重し」と言っているが、憲法を尊重しているのではなく、『国民が憲法を尊重するのであれば、それは天皇としては尊重します』という解釈。天皇が尊重しているのだから、国民も尊重しろという意味とは真逆。

今の我々が、「憲法を尊重する」という積極的意思表示はしないが、誰も否定をしないので、天皇陛下の想いとしては、『国民がそれを認めるのであれば、私も国民が認めるものを尊重します』ということ。

我々が新しいものを作ろうというのであれば、天皇陛下もそれを尊重する。天皇が憲法を尊重するから我々も尊重しなければならないというのは一切ない。だからこそ、今こういう議論をしている。

我々の意が天皇の意につながる。そうしていきたい。

■ 遠慮の文化・学問のすすめ

●参画者

資料配布：「遠慮の文化」、「学問のすすめ」

資料の、「自由は自分勝手ではない」というところで、「自分の立場（分限）とは、天の定めた道理に基づき、人間の情を大事にし、他人を妨げず、一心の自由を守ることである。自由とわがままの違いは他人を妨げるかどうかにある。」という精神性は、「知足」に近い部分はあるかと思うが、必要なことでは無いかと思う。

「遠慮の文化」の資料は、日本作法協会という、吉田茂が作ったところで20年間学んだ人に教えてもらった事。おやじさんが言われていることが記載されている。

江戸時代以前は隣町に行くのも山を越えないと行けない、そのような状態です。我々の祖先は、小さな集落で一生を終えていたのがほとんどです。小さな集落では、ほとんどが顔見知り、あるいは親戚というのも多くあります。そのような世界では、自分だけ、または我が家だけが異端であってははいけないのです。

というところの考え方、また、

年貢も個人ではなく、村全体で納めてきました。江戸時代までは、土地も所有権という概念がなく、村全体の持ち物だったのです。揉め事を最も嫌うというのは、「けんか両成敗」という言葉に繋がります。

元々、融合の文化を持つ民族に、儒学・朱子学などが入ってきて、武士道精神というものが生まれました。「武士は食わねど高楊枝」という言葉どおり、我慢が美德という考えも持つようになりました。個を打ち消すというのは、自分の欲望を我慢する、それと遠慮することと同じ場面も多いです。

日本の慣習やしきたりも「遠慮」が入っていると思われる形があります。

というような考え方を、憲法の言葉の中に入れたいかなと思い、それをどう表せば良いかというところを一ヶ月間考えたが、わかりやすいよう、現代語訳を使ってわかるようにしたら良いのではと思い、今回資料を準備した。

100年企業

●参画者

100年企業は、京都に多いか？

●参画者

京都の土地柄で、なかなか外から物資なども入って来ないことがあり、その中で商売を続けていく為に、「儉約」、「知足」というのを大事にして、伝統的にやってきた。

だからこそ100年企業が多いと言われている。

●参画者

経営者が徳目を学ぶという、稲盛和夫さんの塾に所属していた。経営者が徳目を学んでいく。盛和塾も今はなくなったが、稲盛さんの言う事を聞いていたら会社潰れるなと思った。

みんな他の経営者は、そう思ってやって来たかという、そうではない。気がつけばそうなってただけで、振り返ったら成功していたということが多いのではと思う。

なので、経営者は徳目と言いだしたら危ないのではと思う（笑）。

また、武士道の事で、江戸時代初期に、山鹿素行という人が出てきて、士道論を唱えた。それまでは反社会勢力が政府をやっているようなもので、私達が武士道と言っているような事は、士道論の事を言っているのではないと思う。

■ 藩校・私塾

●参画者

資料：「島津日新公いろは歌」



憲法のルールを作るのに役立つかわからないですが、「島津日新公いろは歌」というのがあり、島津藩の武家の小学生にいろは歌で徳を教えるというもの。

「古の道を聞きても唱えても わが行いにせずば甲斐なし」という和歌が良いなと思った。

●おやじ

藩校は、いろんな藩が運営していたし、松下村塾のような私塾も日本の至るところで開催されていた。これは日本の特徴。徳操を教えるだけの学校を、それぞれの諸藩が自分で運営していたということ。

私塾で徳操を教えていたというのも、かなり日本は珍しい。

少なくとも、宗教があるところではできないし、宗教以外で徳操を教えている人はなかなか居ない。日本は意外にあり、それが基盤になっている。

【軍人勅諭

●参画者

参考資料：「みことのり」

詔の中でも気になったのが、軍人勅諭。教育勅語と並んで紹介されることが多いが、学校教育ではタブーにされてしまっており、名前は知っていても内容までは読んだことがなかった。

明治15年「陸海軍軍人に賜はりたる勅諭」。前文、五箇条、結びという構成になっている。

▼前文

全文は要約すると以下のような内容。

そもそも我が国の軍隊というのは天皇のもとにあったというところから始まって、中世から、中国の制度を導入したことで、防人などの官僚組織が出来上がって、その後いろんな武家が出てきて、最終的には戦国時代に。

その後、江戸時代になったものの外交の面で様々な問題が出てきて、明治になった時、軍事組織を見直すことが重要となり、詔という形で出された。

▼五箇条

- ・軍人は忠節を盡すを本分とすへし

軍人なのに国に報いる心がなかったら、どんだけテクニックや学問で熟練していたとしても、そんなものが偶像に過ぎない。ということや、忠節の無い軍隊というのは、事に臨んだときに、烏合の衆になってしまう。ということが書いてある。

- ・軍人は禮儀を正くすへし

上の位の人達は、下の人達に偉ぶるなとか、下の人達も、上の人達をきちんと尊敬しなさいということが書いてある。

- ・軍人は武勇を尚ふへし

軍人は、勇猛果敢でなくてはならないので、特に大事ではあるが、粗暴な行動はしてはいけないということ。常々人と接する際は温和であることを大切にしなさいということが書いてある。

- ・軍人は信義を重んずへし

細かい事にこだわって、対極を見失って身を滅ぼしてしまった人がたくさんいるので気を付けなさいということが書いてある。

- ・軍人は質素を旨とすへし

戦国娑婆羅のように、派手な振る舞いとしてしまったが故に、節操がなくなってしまって爪弾きになってしまうことは危険なことなのでやめなさいということが書いてある。

▼結び

五箇条は軍人であれば当たり前の事として常に守っていなければならない、ということを行った上で、こういった行為を行う上では、誠心（まごころ）が大事だということが書いてあ

る。誠の心がなかったら、どんなに良いことをやっていたり、言っていたりしても飾りのようなもので、何の役にも立たない。

誠の心さえもっていれば、特に困ることはないので、そういうことが一番大切だということが書いてある。

六法全書などで自衛隊法を見ていると、精神面についての記載が全く無い。軍人は非常自体に対応しなければならないので、心の問題が大切になると思う。

今の法律は、綺麗事ばかりで心がこもっていないように感じる。精神面が重要視される文言があった方が良くないかと思い、紹介した。

●おやじ

私も軍人勅諭は大変好きだが、一般の方に言うのははばかられる。
天皇陛下の勅語は穏やかだが、軍人勅語だけは強烈で、言い回しが強い。

「義は山嶽よりも重く 死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ」

など、ある。軍人だからこそ、強く言ったのではないかと思う。
軍人勅諭通り、うまくやっていけば、昭和の統帥権の乱用というのは起こり得なかった。

明治神宮の「至誠館」の「至誠」というのは、この軍人勅諭から来ている。誠の心を持っていることによって、この5つの徳は自然に身につくはずだということで、至誠という名前が付いた。

今の自衛隊は、愛国心を必要としない。また、忠義の対象が示されていない軍隊というのも非常に珍しい。普通は忠義の対象は誰か、また愛国心とは必ず定められている。しかし、自衛隊は無い。

オーストラリアの軍隊は女王陛下。オーストラリアという国には、忠誠の対象になりうる人が居ない。忠誠というのは精神的な作用であるから政治の長では絶対ない。

総理大臣は、軍令件はあるけども、忠誠の対象になり得ない。政治家というのはそういう性質の人間にはなれない。これは万国共通。政治作用や軍令機能としては政治が権限を有するが、心の問題は異なる。

自衛隊は、心の忠誠はうたわれていないので、それでは生き死にの作戦はできないのではないかと思う。

次回に向けて

自分が直接関わっていることで、「このままだとまずい」という、自分が実際携わっているところでの社会的な問題、また国としてこんな事をしていると、うちの業界は絶対持たないということが色々あると思う。

そういう、自分の身の回りの事をどうしていけば良いのかということを考えて持ってきて欲しい。

政治のことや国体の事は、現実の当事者として携わっていることではないので、抽象的な事しか言えない。

しかし、自分の仕事や自分の生活に関しては、極めて実際の現実的な話ができると思う。それを解決していく為に、法律に、「仮に～規定があれば～になって解決する」という事を考えていく。

法律を作るときには、現実には「どういう効果を出したいか」というのが最初にあるはず。問題がなければ法律も作らなくても良い。問題があるからこそ立法する。

法律にどのような条文を書けば、現状が変わるのかということがわかっていなければならない。なので、どういう文言を使うとその効果が出るのかということを考えて来て欲しい。

ただし、その文言をゼロからやるのは大変なので、今回のように、古い文献から持ってきて活用して欲しい。古典の文章の中の一文で改善できるのではないかと、いうものを考えて来てもらいたい。

逆を言うと、あまり文章を発明して欲しくはない。現実には五箇条の御誓文などで社会を律してきていて、成果が出てきているものが日本には沢山ある。実際に社会を律してきた法律を適用して欲しい。

強制法では社会が萎縮していき、何もできなくなってしまう。社会が急速に萎縮して、新しい思想がなくなっていく。一文を書くことによって、社会がパーと明るくなっていくようなものが理想的。

八紘為宇の詔勅や十七条憲法もそうだと思うが、たしなめているだけではなく、「こうすると良くなるよ」というものの方が良い。

現実の課題を総和していくと、具体的なものになっていくと思うので、日本人全員が携わっている諸々の仕事に作用していく。

一回では手に負えないと思うので、数回に分けてやっていきたいと思う。準備ができた人から進めていくのが良いかもしれない。